

エデル、アルタイの合流点の位置

The Location of Eder, Altai Confluence

2018年10月30日 安田公男
Nov. 22th, 2018 Kimio Yasuda

URL : [chinggis-ff](#)

1. 問題の所在

——そこからチンギス・カンは移動して、エデル、アルタイの合流点を通って移動しながら、移動してサーリが原に幕営した。——

これは元朝秘史の 161 節の一部分である。ここに出て来る、「エデル、アルタイの合流点」、モンゴル語で ‘Eder, Altai-yin Belchir’ の位置に付いて考えを述べるが、その前にこの文の背景を簡単にまとめておく。オン・カンと共にブイルク・カンのナイマン部族領に侵攻した帰り道、二人はバイダラク河でタヤン・カンのナイマン部族の将であるコクセク・サブラクに挑まれた。ところが夜中にオン・カンが勝手に陣を引き払ったので、チンギス・カン、当時のテムジンは単独で陣を退き、戦闘になるのを避けながら無事サーリ・ケールに帰り着いた。この内容の最後が上の文である。移動の言葉が二回繰り返されているが、長く移動を続けたと理解すれば良いのだろう。あるいは、最初の移動の後に到着点の名があったのだが、何らかの理由で省かれたと考えることもできる。

ここに出て来る地名のうち、サーリ・ケールは 47.40N108.07E 地点にある土城遺構を中心とした地域である (1)。エデルはイデル河として、アルタイは山脈として現在に名が続いている。「エデル、アルタイの合流点」の位置について、ハー・ペルレーはイデル (Ider) 河とアルタイトウ (Altaitu) 河の合流点であり、チョロート河の左岸 49N100E の地点と述べた。グーグルマップ (GMap) で見ると 48.82N99.87E の地点で南からイデル河に合流している河がある。名の確認は出来ないが、これがアルタイトウ河なのであろうか。ガルト (Galt) という集落が近くにある。ところが、図 1 の現代のモンゴルの道路地図 (2) を見るかぎり、上記の説は信じがたい。ペルレーの示した地点は主街道から外れている上に少し進めば行き止まりになっている。首都方面に向かう道とはとても思えない。軍団がバイダラクからエデル河を経て帰るのならば図 1 の赤線で示す主街道を用いたはずで、白線で示した経路になる。この経路のかなりの部分は長春真人一行も用いたことが分かっている (3)。よく用いられていたこの街道のどこかに、「エデル、アルタイの合流点」があるはずである。

図 1



2. 新たな候補地の提示

今回新たにエデル、アルタイの合流点にふさわしい地点を提示する。それはウリアスタイルから現代の道に沿って北北東 40km ほどにある、48.04N97.16E の地点である。

図 2



中心部を通る道を北に向かうと、道は曲がりくねっていて傾斜がすこし強いようである。が、分水嶺というほどの大きな高低差はないようだ。そこを越えると北に流れる河に出る。この河は途中で流れが随分細くなり途切れそうになる所もあるが、45kmを流れて 48.44N97.42E 地点でイデル河の本流に合流する。西の小さな川は南に流れてチゲステイ河となりウリアスタイルへと流れる。その先は更にいくつかの川と合流して名を変えながら最終的にザブハン河となり西のアルタイ山脈方面に流れる。即ち、ここは流れの向きが大きく異なる二つの河の上流部分が、3kmほどの距離で接している土地である。エデルもアルタイも河の名そのものではなく、流れて行く方向である。地勢がはっきりと変化するこの辺りが、「Eder, Altai-yrin Belchir」であったと考える。

ただし、Belchir の語は通常河の合流点または落合いと訳されているので、それに厳密であればこの土地は Belchir とは言えない。しかし、この語については村上先生が著書でかなり詳しく述べられていて（5）、その中には、「四達之衝」、「二つの河、または道、枝などの分岐する所」という訳語も紹介されている。このような意味も包含しているのであれば、ここで提案した地形も Belchir と言って良いと思う。専門家の教えを乞いたい。

3. 他の類似地形

ここに類似した地形は、筆者の研究ノート、「テムジン誕生す」でも見出している。それはオノン河の上流のアシンガ河である。現ロシア領にその源流があり南に流れてオノン河に合流する。その源流から北に数 km 離れた所にチコイ河の源流もあり、北に流れてから向きを大きく西に変える。この二つの源流の間には通行路の表示があり、実際高い尾根があるようには見えない。この地形も Belchir と言うのであろうか。極めてなだらかな峠のような地形で、二つの河が向きを変える所は他にもありそうに思える。

3. 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房、東京

<研究書>

- (1)白石典之編（2001）「チンギス・カンの考古学」同成社
- (2)<https://www.google.co.jp/search?biw=1304&bih=666&tbo=isch&sa=1&ei=YRryW6kcxfnxBbL3saAF&q>
- (3)安田公男(2017)「長春真人の旅」chinggis-ff.jp
- (4)安田公男(2018)「テムジン誕生す」chinggis-ff.jp
- (5)村上正二(1987)「モンゴル秘史」第2巻、84-86頁